

慶應義塾中等部保健室における 内科的疾患及び外傷の発生状況

佐村 昭子* 木村 慶子** 南里清一郎**
鈴木 博子** 井上 清**

保健室の日常業務の中で、救急処置は比較的大きなウェイトを占める。我々は昭和57年度に中等部保健室における内科的疾患及び外傷の発生状況の調査、集計を行ない報告した。その後昭和60年度に同じ方法で集計を行ない両者の比較、検討を行なったので報告する。

対象及び方法

対象は昭和60年度中等部生男子486名、女子235名（昭和57年度は男子477名、女子241名）である。昭和60年4月から昭和61年3月迄の間の登校日に生徒が保健室を利用した場合、表1、表2に示すような内科記録及び外傷記録に分け原則として受診した生徒に記入させた。中等部保健室には養護教諭が常駐し、週5日は校医（小児科医）も勤務しており、受診者の診断及び記入事項のチェックを行った。

結 果

内科的疾患による受診者の症状、受診時間ならびに処置を表3に、また外傷による受診

者の種類、受傷部位、受傷場所と時間を表4に示した。さらに外傷による医療機関受診者についても同様に表5に示した。受診と運動との関係は表6に示す如くである。

考 察

内科的疾患では、3年前に較べて男子の受診者数は変化がなかったが、女子は減少していた。男子では前回に較べて頭痛、熱、さむけが増加、腹痛、気分不良、その他が減少していた。このことは気分不良、その他といったはっきりしない訴えをより明確に表現させた結果かとも考えられる。女子では大きな変化はなかった。男子では頭痛が1番多く、女子では腹痛が1番多いのは前回と同じ結果であった。来室した時間は男女共休み時間が大はばに増加し（特に女子）、授業中が減少していた。これは緊急性のない場合、休み時間に受診するようにとの指導の結果と考えられる。授業に遅れないようにする為、保健室を利用する生徒が多くて休み時間内に処理できない場合、緊急を要しない生徒は次の休み時間に来るよう指導している。次に保健室での休養は男子が「休養なし」が少し増加、女子では

* 慶應義塾中等部

** 慶應義塾大学保健管理センター

慶應義塾中等部保健室における内科的疾患及び外傷の発生状況

表1 内科記録

注 (該当欄に○印
ない場合はその他へ記入すること

[illegible]

表 2 外傷 記錄

月 日 曜日 晴・曇・雨

注 (該当欄に○印
ない場合はその他へ記入すること

[illegible]

慶應義塾中等部保健室における内科的疾患及び外傷の発生状況

表3 内科的疾患による受診者

男子 昭和60年度430名(昭和57年度431名)

60年度	頭 痛 27.9%	腹 痛 14.4	気分不良 10.5	熱・さむけ 13.5	咽頭痛 8.0	そ の 他 25.1
57年度	頭 痛 20.9%	腹 痛 17.6	気分不良 13.9	熱・さむけ 9.5	咽頭痛 7.7	そ の 他 30.4

症 状

女子 昭和60年度374名(昭和57年度450名)

60年度	腹 痛 21.4%	頭 痛 19.3	気分不良 13.9	熱・さむけ 11	咽頭痛 8.8	そ の 他 25.7
57年度	腹 痛 21.1%	頭 痛 19.1	気分不良 14.9	熱・さむけ 4.9	咽頭痛 13.8	そ の 他 26.2

男子

60年度	休 み 時 間 67.2%	授業中 13.0	放課後 11.6	始業前 3.5	その他 4.7
57年度	休 み 時 間 59.4%	授 業 中 16.9	放課後 15.1	始業前 5.3	その他 3.3

来 た 時 間

女子

60年度	休 み 時 間 74.3%	放課後 11.5	授業中 7.5	始業前 3.2	その他 3.5
57年度	休 み 時 間 59.3%	放課後 10.9	授 業 中 19.8	始業前 4.4	その他 5.6

男子

60年度	休 養 な し 84.6%	休養あり 15.4
57年度	休 養 な し 82.1%	休養あり 17.9

処 置

慶應保健（第7巻第1号，1988）

女子

60年度	休 養 な し 78.6%	休養あり 21.4
57年度	休 養 な し 80.9%	休養あり 19.1

男子

60年度	投 薬 な し 52.1%	投 薬 あ り 47.9
57年度	投 薬 な し 34.8%	投 薬 あ り 65.2

女子

60年度	投 薬 な し 55.1%	投 薬 あ り 44.9
57年度	投 薬 な し 36.7%	投 薬 あ り 63.3

早退 60年度 66名 (8.2%)
57年度 30名 (3.4%)

「休養あり」が少し増加していた。男子では睡眠不足等日常生活のみだから休養したいと申し出る生徒もいるのでその場合は生活指導に重点を置き安易に休養させることは避けた。次に投薬は、「なし」が大はばに増加していた。又、早退も大はばに増加していたがその理由としては、中等部では遠距離通学の生徒が多い為、発熱等の症状を投薬、休養等の応急処置により軽減させた後、早目に帰宅させ、家庭との連絡を密にし、症状によっては早期に医療機関受診をすすめているためと考えられる。また投薬はなるべく少くし、生活指導に力を入れるようにした。又、学校の中での保健室や図書室は成績の評価につながらない場所なので、何となく学校になじめない、何となくクラスの中にとけ込めない生徒が、心の安らぎを得ようとして来室する傾向

があるので、そういう生徒に対しては十分な配慮が必要である。その為、保健室の利用回数が多い生徒、落ち着きのない生徒、その他問題傾向のみられる生徒は担任に連絡するようにしている。また担任から欠席日数が多い等問題傾向のある生徒については校医に相談があり、校医の判断により、必要あれば専門医を紹介して受診をすすめ、良い結果を得た事例も多い。次に外傷による受診者は男子554名(803名)女子328名(499名)と男女共減少していた。これは、体育、技術、美術、理科実験等外傷を起こしやすい授業担当の教師に、きめ細かい指導を依頼したり、また担任がH.R.の時間を利用して、階段、廊下を走らない、校庭ではボールをけらない、バット等を利用しての遊びの禁止等日常生活での安全に対する指導を行なった結果と考えられる。

度應義塾中等部保健室における内科的疾患及び外傷の発生状況

表 4 外傷による受診者

男子 昭和60年度554名 昭和57年度803名

外傷の種類	60年度	傷 35.6%	打撲 20.2	つき指 9.8	捻挫 6.3	筋肉痛 4.9	その他 23.2
	57年度	傷 38.0%	打撲 20.5	つき指 12.8	捻挫 7.7	筋肉痛 6.8	その他 14.2

女子 昭和60年度328名 昭和57年度499名

60年度	傷 25.9%	つき指 21.7	打撲 14.3	捻挫 10.1	筋肉痛 8.5	その他 19.5
57年度	傷 25.3%	つき指 13.4	打撲 15.0	捻挫 9.6	筋肉痛 10.0	その他 26.7

男子

受傷部位	60年度	指 29.6%	足 27.6	手 17.7	その他 25.1
	57年度	指 25.9%	足 27.3	手 25.4	その他 21.4

女子

60年度	足 35.1%	指 29.3	手 19.2	その他 16.4
57年度	足 35.5%	指 27.7	手 21.2	その他 15.6

男子

受傷場所	60年度	校庭 20.0%	体育館 18.8	グラウンド 17.2	教室 17.0	廊下 2.7	その他 24.3
	57年度	校庭 17.6%	体育館 21.9	グラウンド 15.9	教室 17.6	廊下 4.0	その他 23.0

女子

60年度	体育館 27.4%	校庭 27.4	教室 7.6	グラ ンド 2.7	階段 1.5		その他 33.4
57年度	体育館 32.3%	校庭 13.6	教室 13.8	グラ ンド 6.8	階 段 2.6		その他 30.9

男子

受傷時間

60年度	休み時間 33.0%	部活動 20.2	体育 11.9	授業中 10.3	放課後 5.4	その他 19.2
57年度	休み時間 34.1%	部活動 12.1	体育 14.4	授業中 6.6	放課後 13.4	その他 19.4

女子

60年度	休み時間 31.4%	体育 16.5	部活動 13.7	授業中 6.7	放課後 3.7	その他 28.0
57年度	休み時間 26.3%	体育 14.6	部活動 18.0	授業中 9.6	放課後 9.8	その他 21.7

外傷の種類は男子では傷，打撲，つき指の順で前回と同じく，女子では傷，つき指，打撲の順でつき指と打撲の順位が入れかわっていた。受傷部位は男子は指，下肢，上肢の順で女子は下肢，指，上肢の順で前回と同じであった。受傷場所は男子は校庭，体育館，グラウンドの順で校庭と体育館の順位が入れかわっていた。女子では体育館，校庭，教室の順で前回と同じであった。受傷時間は男子は休み時間，部活動，体育の順で，部活動と体育の順位が入れかわっていた。女子では休み時間，体育，部活動の順で体育と部活動の順位が入れかわっていた。受傷場所は男女共体育館の割合が減少し，受傷時間では，女子は体育がやや増加していたが，男子は減少していた。

これは体育担当教師の授業での安全への配慮がゆきとどいた結果と考えられる。次に外傷による医療機関受診者は71名で前回と較べてやや減少していた。骨折が29名と1番多いのは前回と同じで，その理由として，骨折の疑いがある生徒には，医療機関受診をすすめたり，医療の充実，医療技術の進歩による発見頻度の増加，生活環境の変化，幼児，学童期の運動不足等が考えられるのも前回と同じである。受傷部位における頭部の割合が多いのは，一目，頭の外傷は大事をとっての受診が多く，顔の傷の場合小さな傷でも後に残らないよう形成外科を受診させることが多いと考えられる。受傷場所ではグラウンドでの外傷が増加しており，受傷時間では部活動中のもの

慶應義塾中等部保健室における内科的疾患及び外傷の発生状況

表5 外傷による医療機関受診者（男・女）

昭和60年度71名（昭和57年度80名）

外傷の種類	60 年 度	種類	骨 折	打 撲	捻 挫	創傷	そ の 他
		人数	29名	14	10	7	11
		%	40.9%	19.7	14.1	9.9	15.5
	57 年 度	種類	骨 折	打 撲	捻 挫	創 傷	その他
		人数	29名	14	10	7	11
		%	37.5%	23.8	15.0	16.3	8.4

受傷部位	60 年 度	部位	頭 部 (目・顔・頭・歯)	下 肢	指	上 肢	軀幹
		人数	24名	19	15	11	2
		%	33.8%	26.8	21.1	15.5	2.8
	57 年 度	部位	頭 部 (目・顔・頭・歯)	下 肢	指	上 肢	軀幹
		人数	24名	19	15	11	2
		%	32.5%	27.5	15.0	22.2	2.5

受傷場所	60 年 度	場所	グ ラ ン ド	体 育 館	教 室	校 庭	そ の 他
		人数	26名	12	11	7	15
		%	33.6%	16.9	15.5	9.9	21.1
	57 年 度	場所	グランド	体 育 館	教室	校庭	そ の 他
		人数	13名	12	11	7	15
		%	13.8%	28.8	13.8	16.3	27.3

受傷時間	60 年 度	時間	部 活 動	休み時間	体育	放課後	そ の 他
		人数	30名	20	7	1	13
		%	42.2%	28.2	9.9	1.4	18.3
	57 年 度	時間	部 活 動	休み時間	体 育	放課後	そ の 他
		人数	22名	27.5	23.8	7.5	17.4
		%	22.5%	27.5	23.8	7.5	17.4

表6 受診と運動の関係

	60年度	57年度
ラグビー	11名	6名
サッカー	10名	3名
野球	5名	4名
バスケットボール	4名	9名
バレーボール	2名	2名
女子ソフトボール	2名	1名
剣道	1名	
とび箱	1名	
柔道	1名	

骨折と運動の関係

	60年度	57年度
ラグビー	5名	3名
バスケットボール	3名	4名
サッカー	1名	3名
野球	1名	1名
女子ソフトボール	1名	
バレーボール	1名	
剣道	1名	
とび箱	1名	

が増加していた。つまり、グラウンドを利用している運動部の外傷が多いということであろう。今後、コーチ及び部長のきめ細かな指導が必要と考えられる。運動別ではラグビー、サッカー、野球、バスケットボールの受診が多かった。骨折が多かった運動はラグビー、バスケットであった。グラウンドでの部活動中における外傷は大きなものが多く、また後遺症につながる外傷も考えられるので、その指導には十分な配慮が必要である。また中学生という成長期におけるスポーツは心身の健康、体力の増進を第一に考えるべきであり、直接指導にあたっている大学生のコーチ及び運動部の部長先生にはスポーツに必要な基礎知識を身につけておいて頂くことが必要であると考える。

ま と め

中等部保健室における内科的疾患及び外傷の記録の集計を3年前と比較して、以下の結果を得た。

- 1) 内科的疾患では、3年前に較べて男子の受診者はほぼ同数であったが、女子は減少していた。男子では前回に較べて頭痛が増加、腹痛、気分不良が減少していた。女子では大きな変化はなかった。来室時間は男女共休み時間が増加し、授業中が減少していた。保健室での休養は男子は「休養なし」が少し増加、女子は「休養あり」が少し増加していた。投薬は、「なし」が増加していた。早退も増加していた。
- 2) 外傷による受診者は男女共減少していた。外傷の種類、受傷場所は前回と同じであった。
- 3) 外傷による医療機関受診者数はやや減少していた。外傷の種類は骨折の割合が増加していたが部位には変化は見られなかった。場所はグラウンド、時間は部活動が増加していた。運動別ではラグビー、サッカー、野球、バスケットボールの順であった。
- 4) 骨折の原因となる運動は、ラグビー、バスケットボールであった。
- 5) 救急処置は個々の事例における指導をきめ細かく行なうことにより、より一層の効果をあげることができる。今後大きな指導のポイントとなるのは運動部の激しいスポーツにおけるきめ細かな徹底した指導であろう。その為に1年に1回開かれるコーチ会議を利用してスポーツ医学に関する講演を定期的に行う必要がある。また外傷時における状況を詳

慶應義塾中等部保健室における内科的疾患及び外傷の発生状況

細に調べ問題点をつかんで、保健室から積極的に働きかける必要がある。

本集計にあたりご協力いただきました前校医の城崎慶治先生、看護婦の川原育子さん、中等部の教員及び職員の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 南里清一郎：中等部医務室における内科的疾患及び外傷の発生状況。慶應義塾中等部年鑑1985, 23～28, 1985
- 2) 南里清一郎, 木村慶子, 城崎慶治, 木村キミエ, 佐村昭子：慶應義塾普通部保健室, 中等部医務室における内科的疾患及び外傷の発生状況に関する検討。慶應保健, 3: 22～29, 1984